

# Sea Times

7  
OCT 2003

女性リーダー座談会



大学見学会 (H15.7.20)

## 記事

|                         |   |                               |   |
|-------------------------|---|-------------------------------|---|
| 表紙・目次.....              | 1 | 「ジェンダー研究のフロンティア」COE に採択 ..... | 7 |
| 女性リーダー座談会(1/2).....     | 2 | 志賀高原体育運動場の思い出と現況.....         | 7 |
| 第一回お茶の水フェスティバル開催！ ..... | 5 | 大学見学会参加者の印象.....              | 7 |
| 留学生と日本人学生の交流活動.....     | 6 | ウミホテルの光る海(館山)臨海実験所 .....      | 8 |
|                         |   | 編集後記.....                     | 8 |

## 女性リーダー座談会(1/2)

現在お茶の水女子大学では、学長のほか、部長クラスポストの半分近くを女性が占めています。この女性リーダーの皆さんに集まっていただき、お茶大の現状や課題について話し合っていました。座談会は九月九日の夜、学長室で行われました。

### 出席者

- 本田 和子 学長
- 篠塚 英子 学長補佐(今回の司会)
- 波平 恵美子 ジェンダー研究センター長
- 平野 由紀子 人間文化研究科長
- 内田 伸子 子ども発達教育研究センター長
- 室伏 きみ子 理学部長ライフワールドウオッチャー長

篠塚 まず、現在の仕事のやりがいやご苦労について、また、学生及び一般の女性から、ロールモデルとして期待もされていると思うので、そのことについてもお話しただきたいと思っています。

室伏 理学部というのは、いわば男性の城のようなところで、理学部長会議に出席しても女性は一人居りです。それで、皆様は助けてあげようと思っただけで、苦勞するということより、かえって得をしようと思っただけが多いですね。ただ、お茶大だけでなく、せめて奈良(女子大学)でも女性学部長が出て欲しいなと感じます。場さえ与えられれば多くの女性は、はつらつと頑張れると思います。女性がその社会で活躍するためには、まわりがもう少し、女性に場を与えると言った気持ちが必要だと思えます。

平野 私は五十代の始めに学部長になりました。文教教育学部ではじめての女性学部長です。

篠塚 研究科長も女性で初めてでしょ？  
平野 大学自体が変わったのだと思いま



平野研究科長

すね。生活科学部も理学部も女性学部長が出ていましたが、文教教育学部だけが女性学部長がいまませんでした。

本田 あの頃から少しずつ学内の空気が変わったのではないのでしょうか。お若いけれども、卒業生で立派な方を、とにかく票をいれちゃえと、票が圧倒的に集まったと聞きましてから、私達は他学部で、あーやっただいという気がいたしました。

平野 学部長の時も今もそうでした。でも、足を引っ張るとか、そういうことは一切ないですね、ご自分たちで選んだからということがあるかもしれないけれども、本当に風通しのいい大学だと私は思います。ただ、過去には選挙で選ばれながら、暗に辞退を求められたという女性の先輩もおられたと聞いています、学部長選ではないのですが。そういう意味では本当に先生方も変わったんですね。

波平 女性としての苦勞は全くありません。私は本学に来て学内の状況もよく分からないまま二年でジェンダー研究センター長になりました。最初にセンター長になった時に大学の組織図を見ましたら、生環研(生活環境研究センター)もジェンダー研究センターも組織図の中で空中に浮いているんです。省令研究センターであるにもかかわらず、大学のどこにも入っていない。センターの大学における位置づけをきちんとさせることに苦勞しました。前センター長の原ひろ子先生のなさったことに反対ということではけっしてなく、今までとは違うものにしなればIGS(ジェンダー研究センター)の発展はないと思えて、いろいろ工夫をしてみました。法人化で変わるということになるという事はわかっていましたから研究センターであるという事を大学の中にも外にもハッキリさせる、センターの外向き内向きもハッキリさせる、センターの外向き内向きを一年はそれに費やしたと思います。館センター専任教員)さんも、伊藤(センター専



波平センター長

任教官)さんも、私の意図をよく理解してくれました。一番の協力者はセンターの補佐員たちです。安いお金で一・五倍から二倍位の働きをしてくれました。

それからもう一つは、部局長会議に出席する女性が一人だった時期がありました。最初の頃、概算要求の件で、センターの要求内容に対してある方が真っ赤になって怒って、「そうやってジェンダー研究センターは思いついて上がって侵蝕していくんだ」と怒鳴ったんです。で、私、前任の大学の勢いで「あなたにここでそういうことを言われる謂われはない」と反論したんですが、後になって、「お茶の水女子大学の「洗練された」マナーを知ること、今でも恥ずかしく反省しています。」

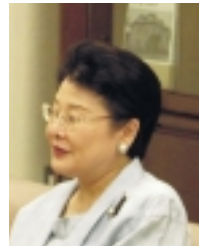
本田 私たちは中で育っているから気づきませんけど、これでもお茶大はエレガントなんです。世の中、大学教授といえども、もつと粗暴な方が多いんです。この方たちはお品がありますね。だからお公家様とお姫様の集団なんて言われるんですけれども。

波平 その一人一人のエレガントさと、大学空間のエレガンスのなさのギャップをある程度縮めることが、今後学生を集めて、外の評価を得るには大事だと思います。

篠塚 内田伸子先生、「誕生から死までの発達科学」COE拠点リーダーとして、また子ども発達教育研究センター長として、いかがでしょうか。

内田 一昨年の十月に、何とか附属学校を維持して、その知的リソースを生かして社会貢献の道を探れないかと本田先生からご提案をいただきました。そこで、以前から構想が出されていた、子ども研究の知見を集約して、教員研修などに貢献できるようなセンターを形にするために、附属校の先生方にも出てきていただいていた会合を重ね、昨年の四月に学内措置で立ち上げることができました。ただ、学内で認知されて、活動をしやすいようにと、省令センター化に向けて、七回ぐらい文科省に参りましたでしょうか。最初は「スリム化に逆行してる」と笑われましてね。しかし、





内田センター長

子どもの学力低下の懸念や、若年痴呆、ゲーム脳が社会問題化しているなど、説明しているうちに、段々と身を乗り出してこられ手応えが感じられるようになりました。ヒヤリングの度に、酒井先生や藤江先生が設置申請書を修正してくださり、事務局の会計課長の加藤さんや係長の岩田さんにも助けていただいていたんとか省令化されました。

今年からは「途上国支援の幼児教育拠点事業も加わったため忙しさが倍加したように感じます。私の役割はセンターの先生方が研究しやすい環境づくりに力尽くすことだと思っております。

COEの申請書づくりはセンター省令化の折衝の時期と重なってしまい、昨年の七月は土日なしの毎日終電の日々でした。その間に学会がありましたし、大丈夫かなという感じでしたけれど、専門領域の異なる先生方との研究内容に踏み込んだ話し合いを通して「協創」の場ができたことが何よりも嬉しいことでした。院生たちも実績をあげてくれていて、学会賞を取っている人が何人もありました。それらをまとめて、なんとかヒアリングまで漕ぎ着けることができました。

採択された後は、まるで「手配師」のようにあちこちに頭を下げ、本田学長のところにも何度もご相談に伺い、助けていただきました。今は四つのプロジェクトが順調に走っております。今年度は事業費が申請額より4割も削減されてしまいました。どの大学もそのように困っておりますが、足りない分は、まずは先生方の研究にかける情熱と、次に、奨学寄附金や自前の研究費などで補填して、何とか納得のいく成果を出していけたらと思っております。

COEの事業の一環として院生のための教育セミナーを定期的に開いております。今年七月にはカリフォルニア大学のイシイ先生を招いて九時から五時まで三日間アカデミック

ライティングの講座を開いたところ九〇人もの院生が参加し、内容の濃い実に有意義な講座が行われました。ああいう授業を大学院教育にプログラム化していく事も必要だなと思いました。

かつては、文教育学部は確かに保守的で、私がお茶大に採用される頃には「女性を探るのは時期早尚ではないか」などという声もあつたとか。その後、次第に女性教官も増えてきて、平野先生が学部長になられた頃から雰囲気が変わってきたように思われますね。篠塚先生は、お母様も具合が悪かつたとお聞きしていますが、個人的にも大変だつたでしょう。

内田 そうですね。ですから、大学院生には、よく檄を飛ばします。女性は、「農耕型」の研究、種を蒔いて花を咲かせ、実を採るまでに時間がかかるような研究に向いていると思う。でも女性のライフコースには難題が山積している。だから先までも見通して、サポート体制を作っていくかないと研究生活と家庭生活の両立は難しい、と。でも、それだけだと院生たちは元気をなくすので、藤原正彦図書館長がおっしゃっておられる、よい研究者になるための「四つの心構え」を言って励ましています。知的好奇心いっぱいであれ、野心的であれ、執拗であれ、そして何よりも、楽天的であれ、と。

篠塚 そうですね、あまり苦しい事はかり言ってしまうと、みんな引いちゃいますものね。楽しい事も織り交せてね。

本田 皆さんのお話をうかがって、一つは、お茶大が、私がいなかつた、ここ五、六年で急に空気が変わった事を感じますね。私がいる



本田学長

時から女性学長待望論はなかつたわけではないですが、多分その間に例えば佐藤学長やそれを取りまく執行部の方々、大口先生とかがある程度流れを作ったんでしょね。独法化を乗り切るためにとか、他にも危機意識や、

いろいろおありになるのかもしれないが、お茶大がお茶大らしく行くためには、好き嫌いに問わず女性をリーダーに選ばなきゃいけないって流れが、結果的にパツパツパツと女性リーダーが表に出てきちゃつたんですね。私も、あれよあれよという感じですね。よそへ行くと「お茶大はよくおやうですね、三五%が女性教員で、評議会には七、八人女性が出てらっしゃるそうですね」って言われると私も正直に「何となくそうなんじゃない、私もお茶大がよかったわけではございません」とお答えするんですけど、でも、皆さんとつても有能なリーダーで、皆さんのような方なしでは夜も明けぬ大学になってきています。これも時代の流れでしょうが、その中で皆さんがちゃんと力を貯えて、外でも認知される方になつて下さつたって事がとてもありがたい事なんです。研究者としても皆さんそれぞれに凄腕でいらして。あとは、男の方々に、僕たちはお客様で、なんて思わせないように、お互いに支えながらやつていく事が必要かなと思います。

それから、室伏さんが女性で得をしている事があるとおっしゃいましたが、正直言っても私もそうで、ジェンダー研究の方に言わせるとそれが甘えだと言われるかもしれないが、たとえば、目立ちますよね。全国的な会議で発言しても、私は女性の立場や視点で言っているつもりはございませんが、男の方がお聞きになると「女性の視点でさわかにかに異議申立をして下さるとけっこうです」みたいな事を言われるんですね。必要だけれども欠けていた部分を無意識のうちに選び取っているのかなという気もいたします。そういう役割もまだ必要なのかなと、それで、つい隙間狙いみたいになるんですね。

大学も、例えば「ジェンダー」とか「子どもから老人まで」とかが目立つてきたというの、他でもおやりになっている所もあるけれども、それをメインの研究にしてらっしゃらない。うちはお金の入ってくる所がございませんからみんなそろって貧しく肩を寄せ集めておりますなどと冗談を言うんですけど

も、そうやっていゝんな所で優れたものが出て来る、それで私はジェンダーと発達があつたら、もう一つ理系でも何か欲しい。そして三つでバランスをとりながら、それを目立たせて、基礎的な所もきっちりおさえていく、そんな大学になると小さくてもやっていけるし、よそ様をご覧になって、女子大も必要なのかなと思つて下さるのかなと思つております。お茶大は小規模大学の希望の星なんだそうです。そういう期待と誤解と錯覚は裏切らないようにというのが私のモットーです。皆さん優れた方がたくさんいらつしやるので、そういう方向に行けば何とか持ちこたえられるのじゃないかと思つております。



室伏理学部長

今、学長から理系でももう一つとお話しがありましたけど、ライフワールド・ウオッチセンターのお話をお願いできますか。室伏 私が理学部長になつた頃に、学内で「理学部はお金ばかり使つてあまり役に立たない」とおっしゃる方たちがいらして、皆さんに理系に立つものと考えていました。何か世の中の役に立つものとして、何かに世の中の先生にお誘いいただいた、三水会という理工系の学長の集まりや、別の会合で、生活者の視点から安心安全を科学的にとらえて発信したい、そういった領域で活躍できる人材育成をしたいという事を申し上げましたら、皆さん、それは女子大でこそやるべきだととらえて下さつて、いつの間にか応援団ができてしまいました。本田先生にお話しいたしますと心配なさらずおやりなさいとおっしゃつて下さるものから、一気に進んで、ついにセンターを作つてしまつたという事なんです。本田 得体の知れない事をよくおつしやつて来るんです。私は、出る杭は育てようというモットーがあるものから、それではやつてご覧になったら、なんて言つたんですが、後で、あれは何なんだろうと思つたりしてたんです。(笑い)

室伏 学長が設立記念シンポジウムで小さな無人駅のプラットホームにスーパードライ線がたくさん停まるようなものだとおっしゃられた、その得体の知れないものが、いつの間にか大きくなりました。皆様のご期待に添えるものにしていくためには、情報の集約と発信、ピュアな研究の進展、そして何よりも、附属も巻き込む形で教育プログラムの策定が必要で、現在、学内外の方たちとご相談しながら進めています。さまざま分野での第一人者をお招きして講演していただく「お茶の水学術サロン」という試みも十月一日から始めることになっております。



篠塚学長補佐

篠塚 何でもトップに直接行くのはマネジメントの観点からよくはないのですが、今回はいろいろの意味で学長の所に情報がワツと集まつて、スピーディに物事が決まりましたよね。本田 小さな大学ですからね、動ける所は動いた方がよいと思つてますね。ただ、私は組織化する事がへたなんです。だから、お気の毒なんですけど、市古副学長に押しつけて。それから、今回のように次々とセンターが立ち上がったたりしなければ、ジェンダー研究センターにもっと支援ができたのと思つて。前から苦労してらした方に申し訳ないと思つて、私がごさいます、あちこちから何やらおもしろいものが出てくるものから。篠塚 ジェンダー研究センターはすごくよくなりましたよ。印刷物もウェブページも。それに情報もよく集めておられますよね。本田 原先生が「この頃お茶大はとつても活気が出てきたし、ジェンダー研もよくやつて、私うれしいわ」って言つてらしたのことでしたよ。波平 前センター長の原先生がたくさんセンターの業績として果実を残してくださつたので、見える形にすることがどうしても大事で見れば分かるでしょではなくて、はつきりと

見える事を心がけたんです。今でこそ、河野（センター専任教官）先生もおいで下さつて安定してきてますが、最初の頃は私も本田先生の所へもよく駆け込みました。本田先生はまた来たかと。篠塚 法人化後の中期計画では女子大として行く方向ですが、その後の皆さんの展望をお聞かせ願いますか。本田 今は乗り切つたと思つていますが、十年先は読めません。一つには日本の経済の動向で、財政が行き詰まつて、国立大学をいっせいに民営化するとか、国策に沿つた研究機関だけを残してあとは民営化するなどというような事が起こるかもしれない、確率としてはそう高くないかもしれないけれども、その時に、女子大で、この規模でいけるかは、正直言つて、分かりません。そこで女子大でやつていく場合は、ここ十年ぐらいの間に、同窓会や後援会組織との絡みも含めて、財政基盤をどうするかという事を一生懸命に考えなければいけません。女子大としてやつていけない場合ですが、あわてて共学化してもこれは大した事ありません。むしろ、本学がつつかつた女子教育のエッセンスが生かせるような統合をするという選択肢かなと思つたりします。これは最悪の事態ですね。そこまで行かないとしても、レゾンテールを明確にするために、こういう研究は世界的です、という部分を目立たせること、学部、大学院それぞれ段階で、どこに出しても大丈夫な学生を育てることを、明確な目標を作つて、力を合わせていくことが大事でしょう。お茶大は小さいけれども日本にあつて然るべきだという認識を、行政は一般納税者に持つていただければ、その後も大丈夫かなと思つています。国際的な拠点として、ジェンダー研究とか発達研究を考えたら、お茶大抜きでは語れないみたいにしてしまえばよい、そういう形に持つていく事が必要かなと思つています。

(後半は次号に掲載します。引き続き本学の将来像、本学の学生や卒業生の魅力などが話題となります。)



## 第一回お茶の水フェスティバル開催!



本田学長と土屋文教育学部長

去る五月三十一日(土)、第一回お茶の水フェスティバル(第一部講演会、第二部懇親会)が開催されました。主催は、お茶の水女子大学、附属幼稚園、小学校、中学校、高等学校、お茶の水芸術事業会。このフェスティバルは、本来、芸術事業会第一回総会後の講演会として企画されたものですが、より強くお茶大卒業生や地域の方への芸術事業会の周知を徹底しようという機運が高まり、お茶大出身の大学・附属学校の先生方の総力結集により開催の運びとなりました。当日は、五月の心地よい風が吹く晴天となる予定が、横殴りの雨と風にもかかわらず共通講義棟二〇一号室は大入り満員となり、十四時に第一部講演会が始まりました。「お帰りなさい」。本田和子学長は素敵な笑顔で卒業生が多く来場している会場に語りかけ、「国立大学改革とお茶の水女子大学のゆくえ」について柔かい語り口で話が進みます。平成十六年四月から従来の国立大学ではなく、国立大学法人お茶の水女子大学という一つの法人となり、教育研究と経営の責任をもって大学運営に当たることや、一七七年の伝統と蓄積を踏まえて女子大学として存続していくことで卒業生をはじめ学びたい全ての女性を支援することなどを説明しました。そして、お茶の水芸術事業会を設立し会員制にしたのは、今後の不確実な大学の財源基盤を少しでも支援するために、一過性の寄付ではなく、経年的なご協力を皆様に期待したいからである、と結びました。

続いて、土屋賢二文教育学部長の講演です。司会の篠塚英子先生の挨拶に「顎がはずれないようにご注意ください」とありました。言葉通り、お腹を抱えている人や涙を流している人など会場は爆笑の渦に巻き込まれました。タイトルは「お茶の水女子大学はどんな人間を生み出してきたか」被害者の観点から。お茶大出身者の長所を十二個挙げて、特徴を説明し、「こういう特徴のあるお茶大出身者がいる限り日本は安心だと思おう」と締めくくりました。これらのお茶の水ブックスレット2『国立大学改革とお茶の水女子大学のゆくえ』(定価五〇〇円、送料別)に収められているので、是非そちらで内容を確認しながら笑ってください。本田学長の参議院での質疑応答も掲載されています。



お茶管OG有志の演奏

第二部は十六時十五分よりスタート。ガーデンパーティーの予定が雨のためマルシェ(学生食堂)での開催となりました。司会菅聡子先生で、乾杯の挨拶は本田学長。昔話に花が咲いているグループや、恩師との久しぶりの再会を喜んでいる人たちなど、みな学生の頃の顔に戻って(?)いました。子供の姿もあり和やかで楽しい懇親会は、お茶の水管弦楽団OG有志の演奏も会に華を添え、大盛会となりました。お茶の水フェスティバルを開催するに当たって、平野由紀子先生を委員長とするお茶大出身教官によるお茶の水フェスティバル実行委員会が結成され、教育研究活動で忙しい先生方が、時間をやり繰りしてフェスティバルの準備を行いました。卒業生や知人にフェスティバルのことを宣伝したり、当日の準備のために会議を重ねたりと大変な努力を費やしました。フェスティバルが盛会のうち

ちに終了できたのも、実行委員会の先生方と大勢のボランティアのご協力のおかげです。お茶の水フェスティバルが附属学校、学生、卒業生、教職員、地域の方を巻き込んで、知的好奇心を満たすと共に、色々なネットワーキング創りの一翼を担うことができればと願っています。次のお茶の水フェスティバルが今から楽しみですよ!

(特定非営利活動法人お茶の水芸術事業会 岩城 聡美)

フェスティバルの様子は [www.npo-ochanomizu.org](http://www.npo-ochanomizu.org) を見てください!

参加者の感想

- ・学長のユーモアと元気にあふれたお話ぶりに感銘を受けた。しかも内容がよく伝わる話だった。
  - ・お話が大変おもしろく、雨の中タクシーでかけた甲斐があった。
  - ・大学のセミナーでこんなに面白く、不真面目なものめずらしい。
  - ・お茶大の新しい活動を体感できた。文書を見ているだけではわからない皆さんの発見があった。
  - ・お茶大の今後の方向が明確に説明され、とても心強い思いがした。卒業後関わりが少なくなりつつあった母校が身近なものに感じられた。
  - ・急な企画でもこれだけの講演者をそろえられるところに、お茶大の潜在力を感じて安心した。腐っても鯛!!
  - ・お茶の水女子大学の伝統と心意気に触れることができました。
  - ・保育があつてとてもよかつた。今後もぜひ保育つきにしてほしい。
- 保育は、附属幼稚園、いずみ保育所の協力により行いました。

|        | 参加者   |
|--------|-------|
| 第1部講演会 | 約350名 |
| 第2部懇親会 | 約240名 |
| ボランティア | 83名   |

## 留学生と日本人学生の交流活動

### TEEA発足から一年

留学生センター助教授 加賀美常美代

留学生センターでは、昨年、九月に国際交流ポランティア (Transcultural Exchange Association, 略してTEEA) グループを立ち上げ、新入留学生のサポートや留学生と日本人学生の交流活動を支援してきました。この一年を振り返ると、十一月の德音祭の参加に始まり、一泊の留学生センター主催の国際教育交流シンポジウムへの参加、東京下町ツアー (十一月)、年度末の報告会 (二月)、お花見 (四月)、鎌倉ツアー (五月)、帰国留学生の送別会 (七月)、鬼怒川温泉旅行 (八月) と自発的に企画してきました。これ以外に、「ビデオ上映会&討論会」や「TEEA新聞」の発行など交流を越え、自分たちの意見を発信する活動へと発展してきています。日常的には共通講義棟三号館一〇二室において、ランチミーティングを継続しています。こうした交流活動は、留学生と日本人学生の双方にとつて多様な体験、友人形成の機会を提供すると共に、人と人とのつながりを機軸とする地に着いた国際交流活動の限らない可能性を秘めています。以下に、TEEAメンバーの留学生と日本人学生の声を紹介しましょう。



国際教育交流シンポジウムの様子

ヘアータコバルチク (ポランド 日本語日本文化研修生) TEEAのメンバーになることができて本当に良かったと思う。初めて来日した私は不安を多く抱いていたが大學生活でどんな問題が起きてもいつもTEEAのメンバーの手伝いに頼ることができた。更にTEEAのメンバーとの出会いのおかげで他の日本人との接触は大分楽になってきた。日本語で話すのに自信がない私はTEEAのメンバーと会う時、どんなに変な日本語で話しても、相手がそれを理解しようとするのを見て、だんだん日本語で話す勇気がついてきたからである。その勇気は外国語を勉強する時に大切な役割を果たしている。またTEEAはただの友達同士の出会いだけでなく、積極的に様々なイベントを作るグループである。いろいろな面白い活動があり、誰でも好きなものに参加することができる。あるいは好きなように自分を表現することができる。最後に、TEEAの皆に感謝の気持ちを伝えたい。そしてTEEAで出会った皆との一年間に限らずこれからも友達でいて欲しいと思う。

陳 熾如 (台湾 交換留学生)

TEEAのおかげで、初めて日本人の友達ができ、友達ができないうちは留学生の悩みの一つであり、私もそのような悩みをもつ一人であった。しかし、TEEAの皆に親切に接してもらい、単なる話し相手から友達になることができた。TEEAの皆と話しているうちに、世界の事情に関して深く認識でき興味を味わえただけではなく、自分の国に対しても再認識させられた。昨年十一月の留学生センター主催の国際教育交流会宿舎では、事前の打ち合わせや合宿中の討論会、発表などで当時プレゼンチャーを感じたが、今では一緒にいた時間はすべからずかけがえのない大事な思い出になっている。八月の鬼怒川一泊旅行は帰国する寂しさも忘れるほど楽しく、一緒に花火を打ち上げたその夜は、いまでもありありと覚えていて。TEEAの皆さん、この短い一年間本当にありがとうございました。私の国にも遊びに来てください。今度私が案内してあげます。

伊藤真奈美 (文教育学部三年、九月から北京大学へ留学)

私はTEEAで活動して国際化社会、異文化交流が日々自分の中に内化されていく様な気がする。その感覚が新鮮で、楽し、声を大にして自慢したいくらい。留学生との交流で私が感じる一番の魅力って何なのだろう? 知らなかつたことを知る楽しさ、そしてそれがリアルであることが最大の魅力なのかもしれない。こんな時代だから旅行雑誌やインターネットでも、世界を知った気にな

なれるし、海外旅行も気軽なレジャーになりつつある。しかし、それは一方的で、交流とは何か違う。私にとって彼女たちはいわば、身近な各国代表団。まして学生という同じ立場なので、同年代の私たちは掛け値なしに語り合え、解り合える。私は世界の国々を彼女たちから学ぶと言っより、感じる。それはちよとしたお喋りの中でも、勿論難しい討論に於いても、常にリアルに私を揺れ動かした。逆に日本について質問されると、私は小さな戸惑いを感じ、これが外国人が疑問に思うことなのだ。と彼女たちの見ている日本を知るのだ。それに対して私は「日本人なのにうまく答えられない。どう言えば分かり易いだろうか」と思う。日本について何かを教える時、私はちよとした責任感を覚える。私たちの交流は言わば草の根レベルだ。だからと言って手を抜くことはできない。ギブ&テイクとも少し違う。対等な関係なのだ。教えると言っより、知って貰っ、この方が確かかもしれない。私は日本人である自分の意思、主観を敢えて交えて日本を語りたい。梓にはまた、客観的な日本の知識なら本やWEBで事足りてしまっから。この九月から、私は北京で留学生になる。彼女たちが私にとってそうであつたように日本代表になつたりも、異文化交流の輪を広げられたらと思う。

小西 理子 (TEEA代表、文教育学部三年)

この一年間、TEEAで文化背景の違う人たちの架け橋になれたらと思いがんばつてきた。送別会の時に互いに別れを惜しむ留学生と日本人学生を見て、私も寂しいと感じると同時に、お互い別れを惜しめる人間関係を育てて良かったと少し感じました。これも留学生センターや留学生相談室の方々の温かな気持ちと、TEEAのメンバーの一人一人が、人と深く関わって行きたいと言っ気持ちがあつたからだと思う。これからも交流が更に活発になるようにがんばって行きたいと思う。

以上、お茶の水女子大学TEEAのメンバーの感性豊かなメッセージをお届けしました。なお、留学生センターの教育・相談・交流に関する情報は <http://ist-server.t.uocha.ac.jp> を参照して下さい。また第一回国際教育交流シンポジウムの報告書、留学生相談室便り、TEEA新聞の残部がありますので、関心のある方は、留学生センター長室 (文教一館一階、教務補佐 03 578 565) へお問い合わせ下さい。



## 「ジェンダー研究のフロントティア」の構築

生活科学部教授 戒能 民江  
(拠点リーダー)

このたび、21世紀COEに、本学の「ジェンダー研究のフロントティア」が地域・国家・グローバルな再構築が採択された。ジェンダー研究センターと大学院ジェンダー論関連専攻を中核に、学内外での多彩な学問分野の連携をはかりながら、今後五年間の事業を展開する。日本におけるジェンダー問題のみならず、グローバル化のなかでの新たな課題にも取り組み、アジアから発信するジェンダー研究教育拠点をめざす。次世代研究者の育成も大きな課題である。若手研究者に対しては、公募研究などの自発的研究活動の支援や研究プロジェクトへの実質的参画促進をはかる。本プロジェクトは九月にスタートを切った。ジェンダー研究の裾野を広げるとともに、昨年採択のCOE「誕生から死までの人間発達科学」とも連携しながら、本学のいっそうの活性化に努めたい。全学のご支援をお願いします。

URL <http://www.igs.ocha.ac.jp/f-gens/>

## 大学見学会参加者の印象

(様子は表紙写真参照)

世田谷区 高校三年 河野 瑛美  
強く感じたのは学生の皆さんの熱意です。全員が目標を持っていて、大学で学ぶことが本当に楽しくて充実していると話してくれました。前から心理学を学んでみたかったのですが、今日ますますその気持ちが強くなり夢も具体的になりました。

## 志賀高原体育運動場の思い出と現況

生活環境研究センター教授 近藤 和雄

昨年から研究室のゼミ合宿を志賀高原の発哺にあるお茶の水女子大学の山小屋で七月末に始めた。真夏の暑さを忘れさせ、温泉を楽しむ環境を、私達だけのグループだけで独占する幸せを、もう二回も満喫している。こんな良い場所をなぜ知らなかったのか。山小屋の前でパーベキューをしながら、夜空の星をながめながらの学生達の声である。



昭和30年撮影の旧施設（昭和13年建造）

この山小屋は、今から六五年前の昭和十三年に当時の東京女子高等師範学校教授（佐々木等氏）の尽力で出来たものである。当時、発哺には、薬師の湯、天狗の湯と山小屋の三軒の

新津市 高校三年 吉田 恭子

私は初めてお茶の水女子大学に来て、まずたくさんの緑に囲まれていて、その多さにとっても驚きました。そして虹を数式で表すという思いもつかない講義はとても興味深かったです。また教授や在学生に話を伺うことができ、とても参考になりました。お茶の水女子大学では、この環境の中で、様々な人に出会い、様々な事を経験し、学べるのではないかと思いました。とてもよいオープンキャンパスでした。

## 雪に包まれた現在の施設



冬の志賀高原は、スキーヤーにとつてまさしくメッカである。その日本で随一の規模を誇るゲレンデのど真ん中に山小屋は建っている。しかも、初級者から超上級者まで楽しめる位置にある。スキーを楽しむのにこんな便利な場所は他にないと言っても過言ではない程の場所である。ここ十年来、私はこの山小屋でお茶大に来る前から家族でスキーを楽しんでいる。

現在の山小屋は、昭和四五年に新しく建て直されたものである。管理人も小林夫妻から二代目の山本夫妻に変わって十年以上経過している。最近では、風呂場にシャワー、西洋式トイレの導入など、設備にかなりの改善がみられ、昔を知る人には今昔の感があるのではないかと。それにしても、昔かならずいた長期滞在のお茶大生が、最近は見られなくなつた。さびしい気がする。

## ウミホタルの光る海 臨海実験所と野外教育施設

理学部附属臨海実験所講師 清本 正人

生命が誕生し、地上では想像もつかないような、いろいろな生き物が数多く生息している海、そんなワンダーランドへの入り口として、千葉県館山市に理学部附属臨海実験所があります。ここに数日滞在しての海三昧の実習が、授業科目としていくつも開講されています。例えば、潮の引いた磯に出て動物や海藻を採集したり、ボートで沖に出てプランクトンを採集したり、夜にウミホタルの青白い発光を観察したり。また実習室では、新鮮な海の生物を使って、生物の体の仕組みについて実験を行います。全国の大学生を対象にし



臨海実験所外観



磯採集



アオウミウシ



ウミホタル

た公開臨海実習では、外国人研究者を講師に招いた国際実習も行われました。ここには発生学の研究室もあり、大学院生などが長期滞在して研究しています。また各方面に、実験材料として海の生物を提供していますが、産卵期を調節する研究の結果、ウニの周年提供が可能になり、全国から問合せがあります。他大学の実習、理科教員の研修、小中高校生各々を対象にした講座などにも幅広く利用され、昨年度の利用者は延べ二千七百人をこえました。

実験所に隣接して、館山にはもうひとつの施設、野外教育施設があり、本学の関係者なら、校外実習以外にも、幅広い用途で宿泊できます。すぐ前には遠浅の砂浜が広がり、手漕ぎのボートも常備され、海水浴には最適で、夏は家族連れで賑わいます。近くには、釣り場も多く、水中観光船やダイビングスポットもあり、楽しみ方はいろいろです。静かな季節に海辺で論文の構想を練ったりするのもいいかもしれません。冬から春にかけての花摘みやイチゴ狩りも人気があり、年間を通して楽しくリフレッシュできます。



館山の海水浴場



野外教育施設外観

志賀高原体育運動場及び館山野外教育施設の利用についてはお茶の水女子大学会計課国有財産担当へ。  
電話〇三 五九七八 五二五

訂正 本誌(前六)号の三頁下段、「国立東京女子大学」は、正しくは「東京国立女子大学」です。

### 編集後記

Tea Times 第七号をお届けします。本学の女性リーダーたちの座談会は二時間にわたり、そのまま起こすと、原稿用紙百枚以上にも及びます。当初は今号に全て収める予定だったのですが、楽しくもりだくさんの内容のため、次号と二回に分けて掲載することとなりました。私も座談会を学長室の隅で聞いていたのですが、出席者の皆さんのフアイトと努力にはあらためて頭の下がる思いでした。決して居眠りをしていただけではありません。

現在本学では、入構者に身分証などの提示をお願いしています。児童生徒の安全確保という趣旨をご理解の上、ご協力いただいています。私、私は、地域、と言うと大げさですが、「ここ近所」の皆さんにお茶大のことを気にかけていただけられるようになることが、安全という観点からも大切だと考えています。本誌はお茶大周辺のご家庭にも配布させていただいていますが、お茶大で何が起きているのか、社会のためにどんなことをしているのかを知っていただき、「お茶大はわが町の大学だ」と皆様に感じていただけるようになればと願っています。さらに、ご近所のお年寄りから子供たちまで、さまざまな人を対象とした催しや講座などを開いて、お茶大の存在を身近なものに感じていただく努力もしていきます。

(編集長 宮尾)

本誌に関するご意見・ご要望、記事の掲載などは、企画広報室にお寄せください。

お茶の水女子大学広報誌 Tea Times  
平成15年10月6日発行  
編集発行/お茶の水女子大学広報委員会

編集/宮尾 正樹(編集長 文教育学部)  
福島 昇(編集事務 企画広報室)

問い合わせ先/お茶の水女子大学企画広報室 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1  
TEL 03-5978-5105 FAX 03-5978-5890  
E-mail info@cc.ocha.ac.jp URL http://www.ocha.ac.jp/

印刷 昭和堂